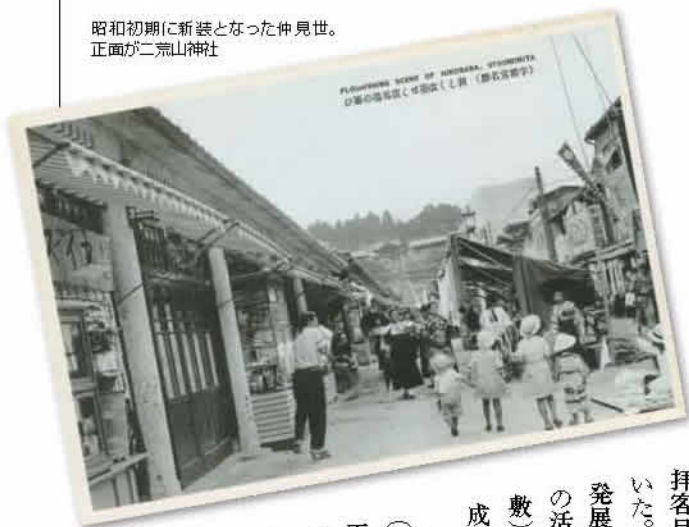


Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から

石井敏夫コレクションより 第37回

昭和初期に新装となった仲見世。
正面が二荒山神社



バンパ仲見世

「バンパよいとこ 泣く子も笑う 私しゃバンパ夜が好き」(「官盆踊り唄」と歌われたバンパ界隈。今でこそ往時の賑わいぶりは薄れたが、かつては二荒山神社の門前に連なる仲見世を中心に、映画館や芝居小屋、飲食店が所狭しと建ち並び、全盛期には「宇都宮の浅草」と称されるほどの活況を呈した。その規模は北関東一を誇り、「官に遊び行く」とは、即ちバンパに行くことと同じ意味を持つと言つてよい。いわばバンパは、庶民にとって娯楽の代名詞だったのである。

「浪花節の起源ともいわれるテロレン祭文読みから、カラクリ覗きめ

がね屋、(中略)夏の氷水屋とカキ氷、冬は牛肉一膳めしと煮込みおでん、カルメ焼き、特に目の前で串に刺したポテトやコロツケを大きな油の入った鍋でジュー。そして、いっぱいにつけたソースのあの味。(中略)生涯忘れられないバンパの味が思い出される」(『うつつのみや絵葉書風物詩』随想舎)。この一節は、バンパ仲見世で生まれ育った石井敏夫氏の回想。バンパならではの賑やかな光景が目につく。

バンパの起りは明治時代の中ごろ。馬場が転訛して生まれた愛称である。当時、二荒山神社門前の広場は、広馬場公園と呼ばれ、参拜客目当ての露天商が軒を連ねていた。これがのちの仲見世街に発展し、一九二〇(明治四十二年)の活動写真館寿座(のちの花屋敷)誕生を機に大歓楽街を形成していくことになる。

寿座に続くように大川座(官料座)、光盛館(帝国館)、電気館、歌舞伎座が次々に開館。仲見世を挟んで両側に並んだ映画館街は、浅草六区に引けをとらない圧巻ぶりだった。花屋敷に併設された動物園を憶えている人も多いのには違いない。



昇り旗が林立する歌舞伎座。
通りの両側に映画館が建ち並んだ

一九二五(大正十四)年には、のちに北関東初の百貨店となる上野呉服店馬場町支店が、参道東側に誕生。洋風三階建ての店舗は「官子」の注目を集め、バンパの繁栄に拍車をかけた。

しかし、多くの人々に親しまれた仲見世であったが、防火、衛生面などから撤去が決定され、一九五九(昭和三十四)年四月、借しまれながら、その幕を閉じた。今、その面影はどこにもない



新装になった大鳥居と、再開発が進むバンパ周辺